

# クビアカツヤカミキリ被害防除効果調査

令和2年度（国補）

川島直通

三重県において、特定外来生物クビアカツヤカミキリによる被害が令和元年度はじめて報告された。本調査では、本種の被害拡大の防止に寄与することを目的として、令和元年に被害が確認された三重県北部の被害地において、クビアカツヤカミキリ被害発生のモニタリング調査および被害防除対策の効果検証を実施する。

## 1. 被害モニタリング調査

クビアカツヤカミキリ被害が発生した調査地には街路樹として800本以上のサクラが植栽されている。これらのサクラを対象として、クビアカツヤカミキリの被害モニタリング調査を実施した。調査項目はフラス排出孔の有無、成虫の脱出孔の有無、樹勢とした。調査は2020年5月20日、6月11日、7月9日、9月9日に実施した。なお、7月9日はフラス排出孔の有無のみを調査した。その結果、2020年にクビアカツヤカミキリによるフラス排出孔が確認された個体数（累積）は、5月20日時点では17個体、6月11日時点では30個体、7月9日時点では34個体、9月9日時点では48個体となった（図-1）。また、脱出孔が確認された個体数は5月20日時点では4個体、6月11日時点では4個体、9月9日時点では10個体であった。また、被害木48個体のうち、樹勢が衰退し半分以上の枝が枯れていたのは2個体であった。

## 2. 樹幹注入剤の効果検証

クビアカツヤカミキリの被害を受けているソメイヨシノ5個体を対象に、2020年6月に樹幹注入処理を行うとともに、無処理木5個体を設定し、フラス排出孔からのフラス排出状況により幼虫の防除効果を調査した。その結果、処理木において、樹幹注入処理日にフラス排出がみられたフラス排出孔のうちフラス排出が止まった割合は、処理14日目以降の調査日においてはいずれも70%を超え、最終確認日である70日後には100%となったが、無処理木においても70日後の時点でフラス排出が止まった割合が92.3%となり、明確な差はみられなかった。一方、処理後新たに出現したフラス排出孔は、処理木では無処理木と比較して少なく、新たなフラス排出が抑制されている可能性が考えられた。これらの結果から、樹幹注入処理はクビアカツヤカミキリの幼虫の駆除にある程度効果があると推察されたが、より確実な防除のためには処理後のモニタリングや追加の防除処理が必要であると考えられた。

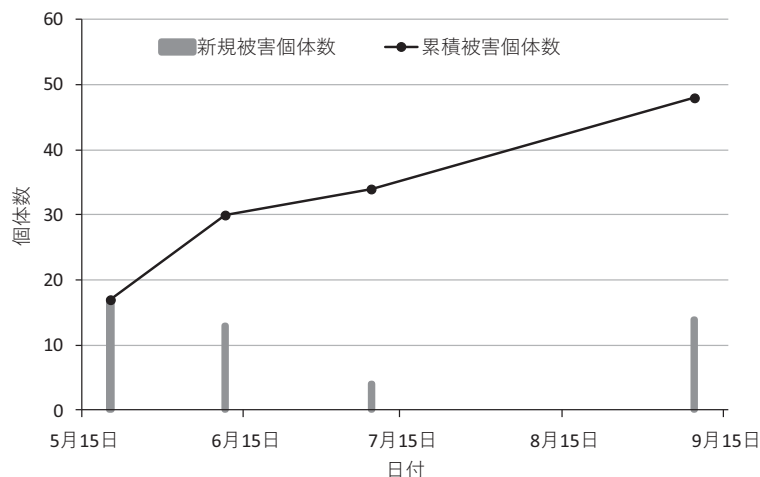


図-1. クビアカツヤカミキリ被害地におけるフラス排出が確認された個体数の経時変化